



「藍染工房」 染色家/櫻井茂雄さん
住所/焼津市坂本 320-4
TEL / 054-629-9555

今回は焼津市にあります「藍染工房」にお邪魔させて頂き、日本の伝統的な染色技法である『型染め』体験をしてきました。今も昔と変わらぬ手法で染め続けられていると言う『型染め』の魅力、製作過程を追いつつら見つけていきたいと思ひます。

暮らしの ミノリグサ

日常では触れることの少ない作業や体験を通し、現代に生きる私たちが忘れがちな、コトやモノの中にある豊かさを見つけ、ココラボ鈴木がお伝えします。

1 「型染め」

『型染め』とは、古くより行われていた伝統技法で、型紙を使って『防染糊』という糊を布に置いて染め抜く染色技法です。染め上がるまでに多くの工程を必要とし、その全てを手作業で行われています。本日の先生である櫻井さんも、この手法で染めの製作をされている一人です。染物に興味を持ってくださる事が嬉しいと、今回のような一日体験や月数回教室を行っています。

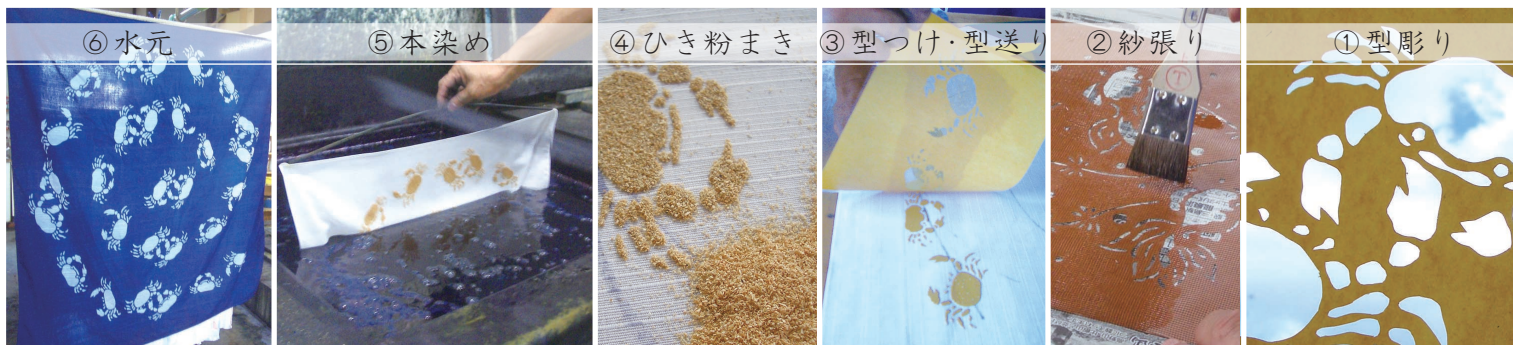
伝統技法には、内なる美しさがある。

体験の合間に、藍の葉や染料を入れる藍甕などを丁寧に説明して頂き、初めて聞くものや見る物でも新鮮な気持ちになりました。中でも、藍の色の基となる『すくも』は、まるで土のようで、これがあの魅力的な色に変わるとは：驚きです。作業を進める中で、度々関心してしまったのが、型染めの材料です。意外なものに、もち米や米ぬか、おが屑があり、この材料が染めに使われるとは想像も付きませんでした。もち米と米ぬかは「防染糊」という糊に使われ、その糊を保護するためにおが屑が使われます。身近なものを使っていた事を考えると、昔の人の知恵にはつくづく驚かされます。

体験を通して「型染め」というのは、藍の型染め自体も美しいですが、作られるまでの工程や材料などに、無駄の無い美しさを感じました。これが今も昔と変わらぬ手法で作り続けられている型染め魅力なのかと思ひます。普段目にする完成品からは伺い知る事が出来ませんが、体験を通して、その中にある豊かさを少し感じられたような気がします。人間の本当の美しさは、心の美しさであり、それは外見にも出てくると言われますが、物にもその内なる美しさがあり、だからこそ魅力的で、長く愛されている理由なのではないでしょうか。



藍の原料 1: タデ藍の葉
2: 藍の葉を乾燥させたもの
3: すくも (2を発酵させたもの)



⑥ 水元
染めあがった生地を一晚水に浸し、刷毛できれいに糊を洗い落とします。布を干し、乾いたら完成です。

⑤ 本染め
布を藍甕(あいがめ)と呼ばれる染料に浸し、取り出して空気にさらして発色を待つ。仕上げたい色になるまで、この作業を繰り返す。

④ ひき粉まき
型付けした糊を保護するために、粉(おが屑)を撒き、糊を乾燥させるために布を干す。糊が付いていない箇所に藍の色が入ります!

③ 型つけ・型送り
布の上に型紙を置き、防染糊をへらで均一に伸ばし、型紙を剥がす。この作業を繰り返し、模様を描いていく。

② 紗張り
型紙に「紗」と呼ばれる目の粗い薄い織物を張る。型紙の完成!(体験では、簡単な網で代用)

① 型彫り
下絵を洗紙(和紙に柿渋を塗り何枚か張り重ねた和紙)に貼り、刀(とう)で模様を切り抜く。(体験では扱い易いビニール製の型紙を使用)